

## 応答

諫早庸一「書評 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』に対する疑義

宮 紀子

『史苑』第七九卷第二号（二二四―二四三頁）に、拙著に対する諫早庸一の書評が掲載された。これまで国内外の書評はありがたく傾聴し、多少反論すべき点があったとしてもそのままにしてきたが、今回はわたくしの研究者としての信用性に関して看過できない一節があり、それがインターネット上において揭示・拡散されていることも考慮し、敢えて一文をしたためる次第である。

### 「引用される二次資料が驚くほど少ない」

独創性が保証される研究としていちばん楽なのは、いうまでもなく誰も扱ったことがない課題を選択すること、新資料を発掘・紹介すること、既知の資料であつても従来試

みられていない方法・切り口によって分析してそこから新たな発見を複数の証拠と共に報告することである。

わたくし個人は、卒業論文から一貫してこのスタイルで研究を進め、原典資料のマイクロフィルム・写真、影印本・校訂本の入手と読解にほとんどの時間と資金を割いてきた。上冊に収録された主題となっている漢文資料は、『農桑輯要』を除き、いずれも国内外の所蔵機関の目録に書名は見えていても注目・利用されることがないものであつた。

いっぽう、下冊で扱ったペルシア語文献については、独自性を確保するために、中国の改革開放以降の資料情況の激変によって総量が格段に増えた漢籍、さらには自身が参加させていただいていた京都建仁寺両足院の抄物調査等から得られた日本語資料との照合・分析を選択した。研究をはじめた二〇〇六年当時においては、そうした試みは皆無に近く、イランやトルコ、欧米の研究者が手をつけていない分野だったからである。日本の西南アジア史、イスラーム研究者が中国にかかわる記述を紹介してくれることは皆無に近かつたので、中国学での利用にむけて資料の翻訳・紹介に力点を置いてきた。こうした意識のもとに研究にとりこんでいるのだから、主題に関する二次文献の引用が少ないのは当たり前である。

本田實信は、絶筆となつた「原典と実地」（『岩波講座

諫早庸一「書評 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』」に対する疑義（宮）

世界歴史一一 月報二 一九九七年十一月）において次のように述べている。

学としての歴史学を志したりすると、何をにおいても最も基本的な根本史料にあたらなければならぬ。それも現存している最良の原典の所在を探し出し、これを手に入れることから始める。活字になっている校訂本は、大いに利用するにしても、当然のことながら校訂者の読みが入っていて、原本そのものではない。翻訳書があれば、それも大いに活用するが、訳文に頼って自分の論理を組み立てたりすると、思いがけない落とし穴にはまることもある。また、どの分野にも膨大な研究蓄積がある。「これは新見解の発見」と意気込んでいると、すでに他の人が解決していることが後でわかり、がっかりしてしまう。関連の研究状況については、アンテナ網をはりめぐらしている必要がある。すぐれた研究書はくりかえし読みたいものだ。しかし、どんなに重要な研究書を何冊読んでも、それだけでは、所詮借りものの知見が得られるだけで、本当の実力とはならぬ。

歴史研究は最良の原典の精読を真の出発点とする。原典熟読がアルファであり、オメガである。

用例や出典を調べる際、インターネットや各種電子検索

ソフトもなかったアナログ時代の研究者たちは、あちこちの図書館で目録をたよりに書棚に目的の資料を探し（周囲の棚に別の関連資料を発見するのも望外の喜びであっただろう）、書物を一冊一冊、できる限り最古最良のテキストを選んで頭から読みとおすという当たり前の作業を繰り返して知識を自らの脳裏に蓄積し、データを抽出しては小まめにノートやカードに整理していた。索引を作ることが業績として認められていたくらいであった。最低限の古典学・考証学の常識が共有、もとい強制・教育されていたから、解説は簡潔に要領よく、学界未知の資料以外は、原典・二次文献いづれも最適と考えられるものを選んで掲載するのが普通であった。

先行論文の内容を逐一整理・解説して研究史を辿り、巻末に二次文献を列挙して頁数を消費するのは、いっけん誠実な行為にみえる。しかし、肝心の本論に何の新味もない——地道な原典解説によって得られる発見と興奮、そのうえで自説の開陳・展開、新たな文脈で読まれたときに従来とは別の輝きを放つ関連資料、それらがまったく見られない「論考」というにはおこがましい文章なら、大学一回生のレポートとさして変わらず、ただの切り貼り細工であって、剽窃・業績稼ぎに等しい。二次文献を山のように積み上げなければいけないということは、それだけ手垢の

ついた課題であることを意味し、一八〇度の転回や大発見を報告するのではない限り、一本の論文に仕立てる価値はない。まして、紀要や研究報告書を除いて、字数を制限されるのが常である（いかに字数を減らし新知見を詰め込めるかに悩むのがふつうだと思うが、しばしば、いかに字数を満たすかに悩む人たちがいるのに驚かされる）。資料が氾濫するこんにちの歴史研究にあつては、先学の読みの訂正、語句の新解釈等は、根底を覆しかねない重要事項を除き註記で済ませ、本論の充実・実証にこそ力を傾けるべきだろう。自らが見出した資料を自らの方法で解析する。それをせずに先人の微瑕や瑣末な問題を大きくとりあげ蜿蜒論じる「省エネ・安全飛行スタイル」が横行してきたから（その割に、提出された代案や結論はお粗末なものであることも、近年とくに目につく）、「人文学」、「古典学」の魅力が急速に失われているのだ。

最初に碑や文書・写本などの新資料の文字起こしをして校訂・公刊、関連資料を収集した者への敬意は、よほど悲惨な水準もしくは学問への姿勢が疑われるものでないかぎり、忘れるべきではない。現物の閲覧が許されない場合も多く、つい十数年前まで肉眼を越える画像解析が可能なデジタル写真は存在せず、カラー写真撮影はとんでもなく高価、傷だらけの白黒のマイクロフィルム（彩色箇所は読み

づらく、シミ・繊維とスクタの判別も難しかった）を睨んで悪戦苦闘しながら筆写していたのだから。後から臨む者は、岡目八目、情報も多いから、誤りに気づきやすいのは当然のことである。とくに誇ることもない。ちなみに国内外の図書館でデジタル画像が公開されることも増えてきたが、写真撮影の申請者（研究者）がいてこそ、の結果であることが多い。日本の国立公文書館内閣文庫や宮内庁のアーカイブ公開は、申請以後一年程度の期間をおくが、フランスの国立図書館などは、申請者に配布されると同時あるいは三カ月以内に公開・配信するので、価値を見出して撮影に代金を払った者よりも早く第三者が研究発表してしまう——「ヒッタクリ」、「ただ乗り」の被害に遭う場合も多い。

なお、わたくしが南京大学に留学していた一九九七年、一九九九年の時点では、中国において碑石の調査・発表の権利・職務は、国内の各機関に細かく配分されており（とうじの経済・出版状況を鑑みれば、その作業が遅々として進まなかったのは仕方がない）、外国人研究者には許されていないかった。とうじの日本の「石刻熱」——そうした事情を考慮せず随意に各地で写真を撮影し、文物局に許可をとらぬまま公刊してゆく行為に対する中国人研究者からの不満・苦言はもつともなことであり、それ以前に中国の文物

法に明らかに違反した行為であった。「今日そこにある碑刻が明日そこにあるという保証はない」という釈明も見られるが、純粹に学問の発展のために思うならば、在地の研究者に情報を提供し、その価値を伝えればよい。そうした研究者にかぎって協力機関の名を挙げず（将来なんらかの社会変動があつた場合に迷惑をかけることを慮つてのことなら、なおさら己の執筆の非合法性を自覚している証拠にほかならない）、*「私が」とか「発見」ということばを使いたがるのはどういうわけだろう（「碑の価値を再発見した」というならともかく、「碑を発見した」は、現地に暮らす人々とはもとより、宋代以降の地方志、清朝・民国の碑目・記録に照らしても失礼で、忌むべき言葉である）*。寺觀や祠廟等には関係者以外立ち入り禁止の区画があることが多く、觀光に近いノリで、中途半端な調査リストなどを報告されても後世の混乱を招くだけで、政府・現地当局の管轄の下、所蔵機関自体による悉皆調査が望ましい。

わたくし自身、現地調査で、是非とも引用したい魅力ある碑刻に遭遇することも少なくなかったが、地方志等の録文を探し、見つからない場合は資料集が公刊されるのを待ちわびてきた。じつさい、無理をしなくとも、順次公開されつつある。拓影・写真を掲載してくれるのが望ましいが、録文を提供してくれるだけでもありがたいことである（録

文の誤字・句読点の間違い等をことさらに論い、得意がるむきも見られるが、ふつうに校勘・修正すれば済む話である。まして、それを論文の主題に据えるに至っては、品性が疑われる）。

したがって、手続き等に疑念をいだかざるをえない論文についてはことさらに言及を回避し、後発であつても現地の論著・資料集を優先した。同様に研究会等の場における剽窃行為、実情等を目撃・仄聞した者の論著については、その分野自体の研究を避け、存在自体を「無視」するか（他の論文にも現時点で判明していなくとも疑義が生じる危険性があるからだ）、もしくはことの経緯を注記してきた。挙げないことに意味がある場合もあるのだ。

なお、書評では、「取り上げる二次文献が驚くほど少ないにもかかわらず、第一七章で大塚修「史上初の世界史家カーシャーニー『集史』編纂に関する新見解——」（『西南アジア史研究』八〇 二〇一四年 二五―四八頁）を取り上げている、その取り上げ方が一方的で偏っている」との批判（二三七頁）がなされている。大塚論文の紹介とガザンの時代の世界史編纂計画の話題は、改行していることからわかるように（拙著九二〇頁）、連続していない別のことがらである。前段にことばを補うなら、カーシャーニーは『オルジェイトウ史』の冒頭で『集史』の構成につ

いて述べているが、第二巻どころか、あたかも第一巻の『ガザンの吉祥なる歴史』までもがみずからの作品のように記しており（当該部分は相当に長文であり、本題から外れてしまうため別の機会を俟つことにし、敢えて掲載しなかった）、同書が『ガザンの吉祥なる歴史』に比べると粗雑であることもまた事実である。カーシャーニー自身が大元ウルスの情報提供者としてのボロト／ボラド丞相と親しく交際していたという記録、諸言語の翻訳官を統括できる立場にあったという記録が見つからないこと、『遼史』、『金史』、『宋史』の編纂等、大元ウルスの情況に照らし合わせて考えると、カーシャーニー側の発言の全てをそのまま受け入れるのは難しいのではないかと、という若干の疑念を示したに過ぎない。

「自らの議論に寄る記述のみを引用する」（二二七頁）という批判に対していえば、諫早による拙著の各章の内容の概観（二二五―二二九頁）がまさにそうであり、主題を捉えていない——興味のない分野は「はじめに」しか読んでいないのではないかと、あるいは第一章のように、医学・陰陽学・数学等の分野を扱っているのに、話の枕に過ぎない『衛生宝鑑』のみを取り上げるなど、意図的な矮小化ではないか、と思われる偏ったまとめが散見された。

ちなみに、自身の足で新資料を渉獵・収集し、その魅力

や分析結果を紹介してくれる家島彦一、渡部良子、大塚修等の独創的・先駆的で堅実な仕事——おそらく数十年後も「原典」に準ずるものとして参照されているであろう——にはつねづね敬意を抱き、新しい論著の発表を追いかけ早期に入手するよう努めている。本文や註に取り上げるのも、それらの価値が「無視」できないものだからこそである。

## 剽竊とは何か

まず最初に、裏の事情ではあるものの、第二章の原載論文<sup>(3)</sup>をめぐる経緯について述べておかねばならない。公刊（二〇一〇年三月）後まもなく、諫早は、京都橘大学の小野浩を介して、二度にわたり電子メールで問い合わせをしてきた。傳野の字が孟質である可能性について述べた箇所——中国の名前と字（あざな）のシステムが理解できない、というのである。『三国志演義』や『水滸伝』など、多少でも中国文学・中国史に触れた者なら常識に属する事柄だが、まず自身で調べる努力もせず、安易に人に頼って解決しよう、関連資料を提供してもらおうとする姿勢は一個の研究者（東京大学の博士後期課程ともなれば、研究者と看做すべきだろう）としてどうなのか、との疑念をもちながら回答した<sup>(4)</sup>。それからしばらくして、第二章

諫早庸一「書評 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』」に対する疑義(宮)

末尾にも附記として敢えて苦言を呈した事態——原載論文を發表した翌二〇一一年、諫早が“Who is FUMUJI? An Examination of the Chinese Sage Representing Cross-cultural Contact in Mongol Eurasia”, *Proceedings of an International Conference for the Philosophical and Scientific Heritage of Nasir al-Din Tusi*, Tehran, Mīrāth-e maktūb なる口頭発表を行う——が発生した。

自分で何か新たな資料を見つけたわけでもないのに、そのような表題を掲げること自体が問題だが、当該の発表において、果たして拙論・回答についてきちんと明記していたのだろうか。この点について、諫早の書評には、拙論が「博士學位論文に役だった」とするだけで、何のコメントも見られない。

同じく拙著を「先行研究の無視が目につく」と批判し、諫早のこんかいの書評に多くの助言をしたという四日市康博<sup>6)</sup>にしても、マルコ・ポーロの研究書を公刊したHans Ulrich Vogel ハンス・ウルリッヒ・フォーゲルが、わざわざ脚注におづつ“As Kuroda Akinobu pointed out to me in private conversation, the work of Yokkaichi Yasuhiro is much indebted to Yajima Hikoichi 家島彦一, an eminent Japanese scholar of Oriental History”<sup>7)</sup>との注意喚起をしている<sup>8)</sup>。

いずれも国際学会での発表という点が共通している。こうした行為こそ反省が必要であり、指弾されるべきではないのか。

さて、逆に諫早は、拙著に諸々の先行研究からの孫引きの疑惑を被せる。しかし、俎上に載せられる第一三章のチンギス・カンやオゴデイによる投下領の分与は、『元史』の本紀や『食貨志・歳賜』を読めばだれもが導き出す基本的なことがらであり、世界で誰が最初に引用し論じたか等、定かにしようがない。そもそも、人・モノ・情報の東西交流を促進した要素のひとつに投下領があったのではないか——文集・碑刻等の記録から裏付けられる——という点について、よく知られている漢文資料以外の『世界を開くものの歴史』や『ムイーン史選』などの記述を紹介するのが主眼であり、本論でも註でも投下領そのものの議論はしていない。まして原載論文の原稿は、二〇一三年九月末に編者・出版社に受理され、二〇一四年八月に刊行されたので、川本正知・船田善之・高木小苗の論者は紹介しようがない(そもそも船田論文は研究史の整理であって、引用すべき積極的な意義は見いだせない<sup>9)</sup>)。挙げられたなかで、唯一拙論に先行する松田孝一の「フラグ家の東方領」(『東洋史研究』三九一—一九八〇年)は、モンケ時代以降の大元ウルス治下の投下領を扱ったもので、チンギス・カン時代

とは直接関係しない。論集の制限字数に依拠して、本題に  
関係がある文献を優先し、特筆すべき原典資料・新出資料・  
重要論文に絞って註を施すのは普通のことだろう。<sup>10)</sup>

さらに諫早は、漢文資料を主に扱う研究者には知られて  
いない貴重な記録であるがために敢えてとりあげた『ム  
イーン史選』の記述について、トーマス・オルセンの論  
考からの孫引きだろうと邪推する。じっさいのところ、  
オルセン論文が収録されるという書籍 A. Khanov and  
A. Wink(eds), *Nomads in the Sedenary World*, London,  
2001 は、入手・目録していなかったが（わたくしが所属  
する京都大学には蔵されていない）、ティムール朝前半期  
の基本資料は、明の正統年間まで射程にいられていること  
もあり、ペルシア語文法を習い始めた当初より収集につと  
めてきた。重要な校訂本はひとつとおり揃えており、購入時  
に必ず、まずは目次・索引からチングス・カン一族の記述を  
中心に気になる項目は片端から目を通し、重要な箇所につ  
箋を立てるなり色鉛筆か蛍光ペンで線を引き、当該ページ  
や翻訳をパーソナル・コンピュータ上のファイルに項目  
ごとに入力する。重要な書籍であれば、つまみ食いせず  
できるだけ通読する（『ヴァッサーフ史』は、難解すぎて  
Ayan アーヤティーの要約本も参照しているが）。論文を  
書けば、関連資料に漏れがないか再度検索する。研究者で

あれば、それは最低限のごく普通の作業だろう（ちなみに、  
個人的な感覚からすると、この書は漢籍でいえば『南村輟  
耕録』と同等の価値がある）。投下領に関する『ムイーン  
史選』の一節は、モンゴル時代のペルシア語資料には記載  
されていない情報だが、『元史』『武宗本紀』をはじめとす  
る記述（拙著八九七頁註19・21。より多くの一次資料の情  
報を提供するため、可能な限り同じ箇所の引用はしないこ  
とを心掛けている）と合致・連動することから、ティム  
ール朝の記述であっても、じゅうぶん信が置けると判断した。  
唯一責められる点があるとすれば、原載論文の執筆時に使  
用していた Parvin Istikh パールヴィーン・イステイフリー  
の校訂本を、それまでさんざんお世話になっていたにもか  
かわらず、拙著収録時に、よりよい校訂本と聞いて求めた  
Jean Aubin ジャン・オバンのそれに差し替えてしまった  
ことだろうか。<sup>11)</sup>

いっぽう諫早は、『ムイーン史選』は、『ティムール朝の  
公式史観を反映したものでは必ずしもなく、王朝年代記の  
なかではどちらかといえば傍流に属する』と記しながら、  
『この部分の記述は、極めてティムール朝の文脈にある記  
述である』と断定すること（二三六頁）に、何の矛盾も感  
じていないようである。

なお、拙著において、『ムイーン史選』は八六九頁で

も参照、ヤズデイーの『勝利の書』——これももとは校訂本の索引から検索・確認した情報である——も六七頁、六九八頁において使用している。ハーフィズ・アブールの諸写本もふつうに利用している。『ムイーン史選』の投下領の記事を引用した研究を総ざらいして最初のものを揭示せよ、といわれても不可能だろう。おそらく『元史』の食貨志「歳賜」の記録と同じくらいとはいわないまでも、『南村輟耕録』くらいには利用されているに違いない。評者の視界には、欧米（英語圏を主とする）を筆頭に、イラン、日本の業績、いくつかの特定大学の最新の博士学位論文、国際学会発表のレジュメ等しか目に入っていないようだが、トルコやロシア、中国、台湾、韓国などの既存の論考も公平に対象とするとなると、そのひとつひとつの作業だけで膨大な時間とエネルギーを消費することになる。それに果たしていかほどの意義があるのだろう。むしろこのような発言がなされることからして、諫早・四日市の両者は、東西交渉史の専門家を名乗りながらも、じつは中国学の研究書・論文——ふつうは徹底した原典主義をとる。二次資料に言及する場合は、よほど重要な根本的論文か、意図的に槍玉に挙げるためのどちらかである——をまともに眺めたことがないのではないか、その研究の起点・着眼は、原典の通読からではなく、二次文献や学会等の交流の場よ

り入手しており、それが習慣化しているのではないか。そうした姿勢で、欧米中心のものの観方や華夷思想から脱却することができのだろうか。

ではじつさに二次文献に敬意を払うはずの諫早の先行論文の選択が公平・適切かといえば、そうでもない。一例として、同じ『史苑』七九・二号掲載の諫早論文「天文学から見たユーラシアの一三世紀——一四世紀——文化の軸としてのナスイル・アッディーン・トウスラー（一二〇一—一二七四）」（一一〇頁註59）と拙著に共通する語彙の註を比較してみよう。singing 先生Ⅱ道士の資料として、諫早は二〇一一年刊行の高橋文治『モンゴル時代道教文書の研究』一点のみを掲げ、しかもほかの箇所と異なって頁数を記さない。その基準は何だろう。同書は先生Ⅱ道士であることについて何の根拠・説明も附していないし、最古の研究でも最新の論文でもない。いっぽう、拙著（六〇七頁註57）では中村淳・松川節「新發現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」（『内陸アジア言語の研究』八 一九九三年）をあげ、その補強として、ほかに原典資料から『統增華夷訳語』、『大元至元弁偽録』、『集史』第二部「中国史」（ペルシア語版・アラビア語版）、『百万の書』を選び、訳文も示す。蒙漢合璧碑についての研究は国内外で相当量あるが、ウイグル文字モンゴル語と漢語直訳体の命令文としてこれが現存最初



期のものであること、永らく土中に埋もれていたため新出資料といつてよいこと、しかるべき手続きをとって発表され、現時点でも最高水準の研究であることを踏まえ、敢えてこれを先行研究の代表として選んでいる。果たしてどちらが読者に対して親切だろうか。諫早のここでの先行文献の選択は、極めて恣意的といえまいか<sup>13</sup>。

さらに、諫早の非難を同じ論法で返すならば、諫早がこの『史苑』の論文で引用する大都の占星術師たちについてのマルコ・ポーロの記事(一〇二頁)、『集史』第一部「ガザンの吉祥なる歴史」の「フレグ・カン紀」【フレグ・カンがバグダード征服のため軍の整治・装備に着手したこと、その周囲を征圧したこと<sup>14</sup>の記】(一〇二頁)、『析津志輯佚』「歳紀」の大元ウルス朝廷が「授時暦」、国字(ハクパ字)暦、ウイグル字暦、回回暦を編纂させていた記事(一〇四頁)、すべて拙著で紹介しているにもかかわらず言及しない——『析津志輯佚』は使用し慣れていないのか『折津志輯佚』に誤り、拙著で原文のみを載せていたためか解釈も間違えている——のは妥当なのか。ちなみに、これまでに諫早が著した論文を調べてみると、『世界を開くものの歴史』、『集史』第一部「ガザンの吉祥なる歴史」、『ヴァッサーフ史』などの基本書を引用・翻訳することは驚くほど少ない、というより皆無に近い<sup>15</sup>。

ひるがえって、自らが知り得た「最新の書籍もしくは博士學位論文」を選択の基準にするのは、いかがなものか。あたりまえのことだが、最新の仕事は最高水準ではない。博士學位論文は、最近でこそPDF化とインターネット上の公開が進んでいるが、世間を騒がせたSTAP細胞論文の筆頭著者の博士學位論文問題を持ち出すまでもなく、人目に晒されることを想定してない場合も多く、出版助成金を受けたものに比して、厳正に審査されているとは言い難い。近年、日本の若手研究者に見られる傾向として、論文の初出の年月を記さず、それらを収録する研究書の年月に依拠するために、原載論文を引用する別人の論者のほうがプライオリティを有するかのように見える事態が起きていることも附言しておきたい<sup>16</sup>。

拙著に関連することでは、第一章・第二章・附論一・二で言及した『博聞録』が『事林広記』の前身であることについて、ごくさいきん入手した呉小紅『至正条格・隠蔵藏玄象図鑑』禁治図籍考弁(『元史及民族与边疆研究集刊』三四 二〇一七年十二月 七三頁)が「宮紀子の推論の過程は疏略の嫌いがあるから、王珂『事林広記』源流考」(程章燦編『古典文献研究』一五 二〇一二年)を参照せよ」と註記しているのに気付いた。ところが、CNKI中国知網で王珂が上海師範大学に提出した博士學位論文

（二〇一〇年四月）を確認すると、『農桑輯要』、胡三省註の『資治通鑑』、『歲時広記』、愛知県穂久邇文庫の『五行大義』、度会家行『類聚神祇本源』、『篆礼文体』、『塵袋』、『太子伝玉林抄』、京都大学附属図書館谷村文庫の『三体詩』、『景泰建陽県志続集』、『西遊記』等、すべて、わたくしの以前の著作『モンゴル時代の出版文化』（名古屋大学出版会 二〇〇六年）<sup>①</sup>、『モンゴル帝国が生んだ世界図』（日本経済新聞出版社 二〇〇七年）、新発現的兩種『事林広記』等で取り上げたものばかりであった。しかも、拙論が紹介した『上官拜命玉曆大全』の序の録文に關しての迂闊な言及からすると、附論一の原載論文もまず確実に目暗している。『事林広記』の前身について厳密な論証をなしていない、甚だ粗略で説得力に欠け、あてずっぽうといつてよからう」という拙論への批判が、論文のウリになっていたが、ほとんど剽窃で、全体に互って何の新説も付け加えていなかったのである。つい最近まで中国の博士論文は国外には非公開であったから、かなり悪質といわざるを得ない。しかし、諫早式の註が主流となるなら、こんごは国内外いづれに於いても王珂の論著が典拠とされるのだらう。いっぽうで、かりに『モンゴル時代の出版文化』の中国語訳が刊行されたとしても、発行年に依拠して、拙著が王珂の論著を「無視」しているとして非難されることになるのだらう。

### 葦の髄から天井のぞく

さて、諫早の書評は、拙著に限らず常に「イル・カン天文表」とその周辺の知見のみを以てなされる<sup>②</sup>。その手法は諺そのままに、非常に危うい。

たとえば、『事林広記』の性格について、『モンゴル時代の出版文化』や『モンゴル帝国が生んだ世界図』等において、その内容から「民間」ということばで括ることがいかに不適当か、モンゴル官僚との交際などもある地方の官吏、科挙を目指す階層を対象とした百科全書であること、朝鮮半島・日本においては王侯・貴族・外交を担う僧侶たちに珍重されたことを、蜿蜒証拠をあげて解説してきたが、諫早は自分が唯一目を通した「曆候類」が最新のデータではないというその一点のみで、あつさり「民間」の産物という通説に差し戻すのである（二三一頁）。最新であることがとくに必要とされたのは、官職名・位階表・給料表・行政区画表・モンゴル官僚との交際に必要な礼儀作法・パクパ字漢字対照表・モンゴル語単語帳等職務にかかわる事柄である。そして、「天文類」、「曆候類」、「算法類」が最新・最高水準のデータではないのには、理由がある（和刻本・対馬宗家旧蔵本、園城寺蔵本等、南宋末期の姿も色濃く留める早期の『事林広記』に稀少な蘇頌『新儀象法要』が収

録されていたこと自体、読者対象が「民間」などではないことを示している。天文に関わる高度な数字は秘匿の対象であり、技術官僚の家の専売特許で、一般官僚・書吏には、行政・事務処理で困らない『九章算術』程度の知識しか求められていなかったからである（むしろ、水利事業等と並行して、朱世傑等が四元術等、南宋時代よりはるかに進んだ数学教育を行い、その教科書が刊行されるようになってゆく政策、時代の流れこそ重要だろう）。全体の傾向のなかで、異質な部分こそ、注目してその背景を考察してみるべきなのに、その作業はしようとしていない。

しかも、大元ウルス治下における「社会学」制度によって、識字率は上昇していったが、刊本を手に行ける人たちはほんの一握りで、ふつうは手写していた（線装本の発行部数を桁違いに押し上げたのは、清朝末期の石印技術の導入以降である。ちなみに、留学当時の南京大学でも、複写一枚の単価はそれなりに高価で屋台で買う朝食の二日分に相当した。貴重な書籍や論文は、教授が強烈な方言で読み上げるのを、学生が各自ノートに書き取っていた。このようにしてテキストの異同が生じるのか、と腑に落ちたものである）。こうした時代状況をきちんと理解する必要がある。

司天台の学問の秘匿性については、この時代の「科学技術の東西交流」の研究を標榜する者なら最低限読まねばな

らない、必読文献の筆頭『秘書監志』にきちんと記録されている。『イル・カン天文表』が参照した中国暦が「宣明暦」、「重修」大明暦、「符天暦」のいずれかしかなかったことは、この『秘書監志』をみれば一目瞭然である<sup>2)</sup>。わざわざベンノ・ファン・ダーレン (B. Van Dalen) の論文を引用する必要(二三五頁)はない。そもそもなぜ「宣明暦」に触れているのか、たちどまって考え、自分で調べてみるべきだった。この一節からは、諫早が『秘書監志』の天文関係の記事さえ目を通していないことが露呈する。じっさい『史苑』掲載の諫早論文をみると、たしかに『秘書監志』の記事の引用は、ほぼすべて山田慶児の『授時暦への道』からの孫引きである（山田慶児のモンゴル語直訳体・史牘体の文献の解釈は非常に問題が多いが、工具書や合璧文書の知見もあり充実していなかった状況下で、専門外であっても、同僚であった田中謙二等に頼ることもなく、ともかく自力で読む努力をした。しかし、現在その解釈に依拠・盲従する必要はない<sup>3)</sup>）。そして、孫引きの欠点・限界がまさにここに明確に見えている。二次文献に頼ると二次文献の文脈でしかものごとを見られず、二次文献が言及しなかったものは、知らないままになるのだ。

自らの知見に固執し、とうじの社会状況、あるいは高麗や日本からの外交使節や留学僧がこの書を探し求め大枚を

叩いて購入したのはなぜかを理解しようとせず、「特定の書物が広く流布したことは、その書が最新の知見を盛り込んだものであったことを必要条件とはしない」云々等として、クーシュヤールの『占星術入門の書』に関する事例を開陳されても（二二二―二三三頁）、困惑してしまう。なお、『珍貴の書』に華北の脈訣書ではなく『晞范脈訣』が選ばれた理由は、拙著（二〇一七―二〇一八頁）でも指摘しているように、挿絵の多さ、フレグ・ウルスの江南投下領である湖北の宝慶路が、出版のさかんな江西の臨江路・吉安路などに近かったこと、などが考えられるだろう。

こうした議論の噛み合わないさは、ときに意図的に行われているのではないか、とさえ思われる。

諫早は、華北の数学の飛躍と「イスラーム科学」の流入について、数学的考察・検証を要求する。しかし、もともと第一章は、和算をあつかう理学部数学科の研究者たちの求めに応じて準備されたもので、「暦数の会」なる研究会において、歴史文献から問題提起をした経緯をもつ。当時、この会に参加・傍聴していた諫早も重々承知していたはずである。おそらくこうした発言・要求がなされるのは、さいきん、諫早が須賀隆とともに、『イル・ハン天文便覧』に見える中国暦・ヒジュラ暦換算表の再構——モンゴル帝国期東西天文学交流の再考——（相馬充・谷川

清隆『第五回「歴史的記録と現代科学」研究会集録』国立天文台 二〇一九年）という論文をものしたからこそだろう。しかし、その数学の検証自体はあくまで須賀が為したものである。単独の Tarikh-i Qita in the Ziy-i Ilkhami The Chinese calendar in Persian, SCIAMVS, 14, 2013 に遡って確認してみると、じつさいには、ファン・ダーレン・ケネディ (E. S. Kennedy)、数内清、今井湊『天官書』(油印) 等の仕事に依拠しているから、暦の専門家を自認する諫早本人には、その検証能力がなかったことになる。ここに共著にしばしば生じる帰属の問題がほの見える（じじつ、『史苑』掲載論文でも、数学的検証の成果については、もはやファン・ダーレン以下の名前は挙げられず、諫早二〇一三しか引用しないし、二〇一六年の遠藤光暁との共著論文<sup>26</sup>でも、『イル・カン天文表』のアラビア文字表記の漢語を最初に解説した今井とケネディの論文は参考文献から消え、諫早二〇一三、諫早が二〇一五年に東京大学に提出した博士学位論文のみが挙げられる）。

この共著論文において諫早が独自に提出した唯一の主張らしきものは、須賀の計算を踏まえての「モンゴルによる『東西の暦の統一』への志向といった大きな議論／見栄えのよい議論」への疑問・否定であった。これは、拙著の「モンゴル帝国の命題のひとつであった東西の暦の統一のため

に(五八二頁)<sup>27</sup>、と“モンケの大構想(五八一頁、五八五頁)”を指したもののだが、『秘書監志』の記述をもとに、暦の編纂と並行しておこなわれた事業——『大元本草』、『天下地理総図』の編纂が、フレグ・ウルスと連動したもので、それぞれ薬物の東西の呼称を併記する図鑑、東西の地図の“混一”(合体)であったこと、また暦自体も、前述の『析津志輯佚』等から『授時暦』、『回回暦』／『万年暦』を併用していたことを述べているように、ここでいう“統一”が、『東西の英知の集積と統合(二〇一九頁)』を意味し、度量衡や金銀比価の対照表の作成と同様の過程をたどったことは、通読すれば理解されるはずである。

『広辞苑』では、“統一”は“多くのものを一つにまとめ上げること。統べ合わせて支配すること”であり、統合は“二つ以上のものを一つに統べ合わせること”だが、“統括”ということばを選んだほうがより適切だったかもしれない。

なお、諫早は『授時暦』を『元史』の「暦志」にのこる姿——『暦議』三卷(一二八三年)と、『暦経』三卷(一二八〇年)のみで考えているようだが、郭守敬の著述に限っても、『立成』二卷、『推歩』七卷、星占いについて記した『軫神選択』二卷と『軫神注式』一三卷、『時候箋注』二卷、『修改源流』一卷、『儀象方式』二卷、各地の観測結果に基づ

いた『二至晷景考』二〇卷、『五星細行考』五〇卷、『古今交食考』一卷、『新測二十八舍雜座諸星入宿去極』一卷、『新測無名諸星』一卷、『月離考』一卷等があった。さらに、司天台には、郭守敬の同僚・配下たちの数多の著作、各種草稿、観測機器等の設計図、計算ノート、毎年毎月の観測日誌、モンゴルの広大な版図からそれぞれ送られてくる観測結果・情報など膨大な資料も保管されていた。モンゴル帝国の重要な収入源のひとつであった暦日銭の暦日——具注暦もまた、『授時暦』に含まれる。同じことは、『回回暦』／『万年暦』、『イル・カン天文表』についてもいえ、マラーガの司天台には、膨大な資料が年々蓄積されていたはずである。その意味で、<sup>28</sup>が「大元ウルスにおいて『諸家暦』と訳されたように、*zū-i Ilkhānī*も通称として用いられてきた『イル・カン天文表』ではなく、そのまま『イル・カン暦』と訳してしまつてよいのかもしれない。のこっている現在の資料の数学的検証では、東西の司天台の交流が無かったとは、断言できない。外堀を埋めてゆくしか方法がないのである。

共著は、いずれかが寄生するものであってはならず、互いに“余人を以て替え難し”というレヴェルの——単なる通訳では務まらない、相手の分野の知識もそれなりに有する——自立した研究者どうしが、絶妙な均衡のうえに、そ

れぞれの知見を披瀝し高め合うものだろう。<sup>(28)</sup> 諫早の業績のかんりの部分は、共著が占めるようだが、それらをひとつひとつ検証した場合、果たしてどうなるか。たとえば『イル・カン天文表』の研究書として、近い将来、これらの論文を一冊に纏めるとしたら、背表紙に諫早のかつての共著者たちの名は留められるのだろうか。

## 「巨人の肩の上にいる矮人」

諫早は書評の締めくくりとして、最後にわざわざラテン語の格言「巨人の肩の上にいる矮人」をひっぱりだしてきて自戒と称するものの、わたくしはぎやくにそこに「研究の総括者・支配者」としての宣言を読みとり、同時に干支の逸話——牛の背に乗った鼠を思い出さずにはいられなかった。

ときには研究史を整理することも必要である。二次文献の知見をより合わせ、そこから新展開を求める研究スタイルも否定はしない。しかし、その場合は数多の地道な研究を踏み台にしたうえの知見、「焼き直し」であること、自身の読解・発見の分量・実寸をつねに意識し、謙虚であるべきだろう。

研究者として、わたくしは巨人とはりあって、かれが見

た風景よりも遠くを見たいとは思わない（そもそも巨人と同等の視力をもつことが前提だろう）。巨人の目に留まらなかったものを、低くても別の視角から見ただけだ。

【追記】秘書監の蔵書（拙著六一四頁）のうち、*Majisiz* の訳語『造司天儀式』は、「司天（＝観測・占星）」にいたるための法式制度」を意味し、*Hay'at* の『窮曆法段数』すなわち「曆法をきわめるための章段節目」と対になっている。内容を正確に把握、吟味したうえで呈示された訳語であり、諫早が書評二三三頁でスイヴィンを受け売りしている「天文機器に関わる記述」ではない（直前の『諸般算法（の）段目并（びに）儀式』を見れば、いかに訓読すべきか判る）。この事実は、漢語詞典を引かずに英語の研究を鵜呑みにする諫早の立論の脆弱さ、大元ウルスのエリート官僚たちの翻訳能力に対する侮りを示す。なお、オルセンが利用する漢籍は、『元史』、数点の元人文集と筆記等、初步的水準にとどまり、多くは二十世紀半ばの蒙元史・中国科学技術史の英語の論著・翻訳から孫引きしたものである。

註

- (1) 井黒忍『分水と支配——金・モンゴル時代華北の水利と農業』(早稲田大学出版部 二〇一三年 一七頁)。
- (2) 宮紀子『オルジェイトウ史』が語るアジキ大王の系譜——外交使節の往来と歴史書の編纂(一)——『(東方学報) 九四 二〇一九年一二月刊行予定』。
- (3) 宮紀子『東から西への旅人・常德——劉郁『西使記』より』(窪田順平編『ユーラシア中央域の歴史構図』総合地球環境学研究所 二〇一〇年三月)。
- (4) 最新の Yoichi Isahaya, "Sino-Iranica in Pax Mongolica: The Elusive Participation of Syriac-Rite Christians in the Ilkhanid Translation Project" 榮新江・党宝海『馬可・波羅と10・14世紀的絲綢之路』(北京大学出版社 二〇一九年六月 三四—三六二頁)をみる限り、現在でもこの姿勢に変わりはないようだ。やはり自身で見出した資料は存在せず、拙著一〇二〇頁註3、一〇二五頁註72を起点に、楊巧の資料提供(一九四一年の韓儒林「愛薛之再探討」に依拠)・邱軼皓の翻訳協力を得て一本の論文に仕立てたものである。『牧庵集』卷二「考崇福使阿實克岱(＝阿思帶)追封秦国忠翊公制」の阿實克岱を、ボロト丞相とともにフレグウルスに赴いたイースー・ケレメチの息子と看做し、『珍貴の書』の翻訳官と考えるのが眼目だが、『牧庵集』当該箇所直前の「秦国忠翊公之弟巴克美巴追封古哩郡恭懿公制」、「蒙克特穆爾祖公伊蘇(＝也速／也先)追封秦国康惠公制」、「祖妣克呼(＝怯烈)氏」和斯納蘇／呼實尼沙／贈秦国夫人制」と清朝の改字法を考えれば、祖父「イエス／イエスン」、祖母ケレイト氏クシユ・ニシヤ「ン」(ネストリウス派キリスト教徒)、父アスタイン、叔父「バシユ／バシユ／バクシ」[「ベク／ベイ」、尚書左丞メング・テムルという系譜で、秦国忠獻公、拂林王を追封されたイースー、サラール族出身の正夫人が構成した一家とは関係がない。崇福使の定員は4名あり、そもそも、拙著七二〇頁に紹介するように、ラシードウツディーンは『ガザンの吉祥なる歴史』においてイースーを罵倒しており、その息子を自身の事業に起用することは考えにくい。
- (5) 後述の須賀・諫早論文と異なり、ResearchmapにPD F版が掲示されていないので、内容は未確認である。
- (6) 四日市康博「内陸アジア」(『史学雑誌 回顧と展望 二〇一八年の歴史学界』二〇一九年五月 二六七頁)。
- (7) Yasuhiro Yokai, "Horses in the East-West trade between China and Iran under Mongol Rule," Bert G. Fragner, Ralph Kauz, Roderich Ptak, Angela Schottenhammer(eds), *Pferde in Asien: Geschichte, Handel und Kultur*, Wien, 2009, pp.87-97.
- (8) Hans Ulrich Vogel, *Marco Polo Was in China: New Evidence from Currencies, Salts and Revenues (Monies, Markets, and Finance in East Asia, 1600-1900)*, Nov 2012, pp.170-171.
- (9) 年月の経過とともに、各論著は、奥付の年月日によって前後関係が判断されるようになる。しかし、必ずしも奥付と実際の公刊日は対応していない。じつさいには、半年、一年遅れで発行されている雑誌もある(受理日・校正期間を書く習慣の定着が必要かもしれない)。論集であれば受理

諫早庸一「書評 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』」に対する疑義(宮)

されても共著者が締切りを守らない、資金等の問題で刊行が大幅に遅延する、などの事情が生じる場合もある。学会会員でなければ入手の遅れる雑誌もあるし、図書館に開架されるまで一定期間を要する。インターネット上で刊行と同時に配信される雑誌もまだ多くない。以上の点には留意が必要だろう。

(10) たとえば、松田孝一「チンギス・カンの国づくり」(白石典之編『チンギス・カンとその時代』勉誠出版 二〇一五年 一・二八頁)は、本書第一章(原載論文は二〇〇八年六月刊行)で紹介した対馬宗家旧蔵の『事林広記』を扱いつつも、拙論には言及していない。既知の『事林広記』諸版本にも収録される「皇元朝儀之図」の解説が主題だからである。いっぽう、川本慎自「室町文化と宗教」(高橋典幸／五味文彦編『中世史講義』ちくま新書 一五八・一六一頁)が中世の禅僧の算木計算による数学講義について述べる際、写真を掲げて紹介・論ずる桃源瑞仙の『易抄』は、自身が発見したかのように述べているが、つとに拙著第一章をはじめ、「全真教からみたモンゴル時代の東西交流——和算の来た道——」(東西学術研究所、経済・政治研究所、法学研究所公開シンポジウム「アジアが結ぶ東西世界」二〇〇八年九月 のち橋寺知子・森部豊・新谷英治編『アジアが結ぶ東西世界』関西大学出版部 二〇一一年三月に収録)で紹介し、のちに「和算の源流をもとめて——『モンゴル時代』の贈り物」『科学』八七・一〇「特集シルクロード・交流を復元する」岩波書店 二〇一七年一〇月)で紹介していたものである。①同氏の「禅僧の数学知識と経済活動」中島圭一編『十四世紀の歴史学——新たな時代への

起点」高志書院 二〇一六年 五九・八二頁)に「全真教からみたモンゴル時代の東西交流——和算の来た道——」の参照が確認されること、②主題の根幹資料として使用していることから、こちらはかなり問題がある行為といえるだろう。

(11) 宮紀子「モンゴル王族と漢児(キタイ)の技術主義集団」(小南一郎編『学問のかたち——もう一つの中国思想史』汲古書院 二〇一四年八月二一八頁)、『モンゴル時代の「知」の東西』六六八頁。

(12) 原載論文ではなく、それを収録した「最新」書からの引用にこだわったのだろうか、分厚い研究書にもかかわらず当該の頁数を記さないのは不親切である。この研究書の語彙索引は、一頁ずつずれている箇所が見え、あまり役に立たない。Yoichi Isahaya, *History and Provenance of the "Chinese" Calendar in the Zhi-i-Ilkhānī, Turkh-e-Elm, No.8, 2009, pp.27-28* を見れば、よく高橋文治「モンゴル時代全真教文書の研究(二)」(『追手門学院大学文学部紀要』三二号 一九九七年 二〇頁 のち『モンゴル時代道教文書の研究』汲古書院 二〇一一年 一三二・一三五頁)を参照したものと判明する。しかし、そうであるなら、高橋も言及するように、一二三八年の「鳳翔長春觀公拋碑」の拓影を挙げて「先生」が道士であることについても簡単な註を施す蔡美彪『元代白話碑集録』(科学出版社 一九五五年 五・六頁)を挙げるべきだろう。また、『史苑』収録の諫早論文をみると、山田慶児「授時暦への道」(みすず書房 一九八〇年)に多くを依拠していることが判明するが、同書四七頁に「CUN」が道士であることが自体は



すでに言及されているので、諫早二〇〇九の独自性を突き詰めると「こんこの学界では、漢児（キタイ）・ウイグル暦を漢児（キタイ）暦と呼ぼう」という提言しか残らない。

(13) ちなみに、諫早が引用する高橋文治『モンゴル時代道敎文書の研究』に、二次文献の引用はほとんど皆無である。また同書は加筆にあたって、拙著第五章すなわち宮紀子『龍虎山志』からみたモンゴル命令文の世界——正一敎敎団研究序説——（『東洋史研究』六三・二二〇〇四年九月）とほぼ同じ作業を行い、さらに拙著の第一章などを踏まえた修正も見られる。

(14) 『モンゴル時代の「知」の東西』六四一頁、七一〇・七一頁、六二六・六二七頁。

(15) 『ヴァッサーフ史』第一巻く第三巻が一三〇三年にガザンに献呈され、その一三二二年に第四巻（自筆本が現存）、一三二八年に第五巻が成ったことは、諫早が註14に引用する文献よりはるか前、本田實信「ワッサーフ」（『アジア歴史事典』九一九六二年 四〇六頁）に記されている。そして、同様の発言はおそらくさらに遡ることができるだろう。ただ、第一巻の序文がヒジュラ暦六九九年八月（一二〇〇年）に記されていること、拙著第一七章での検証などからすると、『ガザンの吉祥なる歴史』の成立と密接な関係が予測され、『ガザンの吉祥なる歴史』諸写本がまさに大きく2系統に分かれるように、最初の三巻もオルジェイトウへの献呈時に加筆されている可能性は否定できない。漢籍でも、たとえば『程氏家塾読書分年日程』が延祐二年（一三二五）に序文を附して刊行されたのちも、内容を補充されつづけ（至治三年／一三二三刊の『大元通制』

等が追加される）、現在は初版ではなく元統三年（一三三五）本の系統しか見ることができないといった実例があるからである。

(16) 『史苑』掲載論文で引用・翻訳される『集史』第二部「中国史」の序文は「History and Provenance of the “Chinese” Calendar in the Ziji Ilkhanīp. 26. *تاریخ و منشأ تقویم محمدیان* Mohammad Bagheri の助力を得たという」。

(17) こうした傾向への対抗・自衛措置としては、森安孝夫が『東西ウイグルと中央ユーラシア』（名古屋大学出版会 二〇一五年）において提示した方式——原載論文とそれ以降の以降の修正・考察を明確・厳密に分ける——が有効であろう。ただし、ひじょうに読みにくい。

(18) それぞれ初出は、「対馬宗家旧蔵の元刊本『事林広記』について」（『東洋史研究』六七・一 二〇〇八年六月）、「叡山文庫所蔵の『事林広記』写本について」（『史料』九一・三 二〇〇八年五月）、「陳元靓『博聞録』について」（『汲古』五六 二〇〇九年十二月）、喬曉飛訳「新發現の兩種『事林広記』」（『版本目録学研究』1 二〇〇九年一〇月）。

(19) 原載論文は、『混一疆理歴代国都之図』への道——14世紀四明地方の「知」の行方——（藤井譲治・杉山正明・金田章裕編『絵図・地図からみた世界像』京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」二〇〇四年三月）。

(20) 諫早庸一「書評 志茂碩敏『モンゴル帝国史研究 正篇』」（『内陸アジア史研究』二九 二〇一四年 三月 一三五・一四五頁）。

諫早庸一「書評 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』に対する疑義(宮)

- (21) 大元ウルスから大明にかけての暦や数学に關しては、別に一書を準備中である。さしあたっては、宮紀子「アフロ・ユーラシアをめぐる人・物・知」(中西竜也・増田知之編『よくわかる中国史』ミネルヴァ書房 二〇二〇年三月) 参照。
- (22) 後掲の須賀・諫早論文を見ると、『元史』も山田慶兒・Allsenの研究の孫引きであることがわかる。しかも、諫早は「フビライの潜邸時代」という訳文から「クビライが「皇太子」であった時分」などという史実と異なる解釈をしている。
- (23) 当該論文の『イル・カン天文表』のヒジュラ暦と中国暦の換算表の検証のうち、『授時暦』との比較計算はあまり意味がない。『集史』第二部「中国史」や『珍貴の書』の序文からすれば、『イル・カン天文表』の中国暦は、傳野が伝え解説したもので、それぞれの暦の成立年からしても、『授時暦』ではありえないからだ。
- (24) 暦の専門家を自認するなら、トゥースイーや司天台の記事の博搜はもとより、球面三角法等の高等数学の習得、前後の暦、フレグ・ウルスや近隣の諸国においてなされた注釈書などの収集・比較分析に向かうのが普通だろう。
- (25) 研究班・読書会において行われた翻訳等の共同成果を、班長や幹事が監修等の名目を以て書物として発表してしまう事例は多々見られ、「知」の搾取・収奪とも揶揄されている(もちろん、こうした成果は団体名で発表するのが筋だ)。)
- (26) ENDO Mitsuaki & ISAHAYA Yoichi, Yuan Phonology as Reflected in Persian Transcription in the Zī-i Ilkhānī, (『経済研究』八号 二〇一六年 一三八頁)。
- (27) 『モンゴル帝国が生んだ世界図』八二頁。
- (28) 共著だからこそその利点を發揮している優れた業績としては、前掲の松川節・中村淳「新發現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」、本田實信・小山皓一郎「オグズ・カガン說話1」(『北方文化研究』七一・九六三頁)、G.Hermann & G.Doerfer, Ein persisch-mongolischer Erlaß aus dem Jahr 725/1325, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* - *chapt* Band 125-2, 1975, pp. 317-346, G.Hermann & G.Doerfer, Ein persisch-mongolischer Erlaß des Galäyeriden Šeyh Oveys, *CAJ*, vol. 19, No. 1-2, 1975, pp. 1-88, 'Imād al-Dīn al-Hukamāi & 渡部良子 & 松井太「ジャライル朝シャイフ・ウワイズ発行モンゴル語・ペルシア語合璧命令文書断簡2点」(『内陸アジア言語の研究』三二・二〇一七年 四九・一四九頁)、川口琢司・長峰博之「一五世紀ジョチ朝とモスクワの相互認識——ロシア語訳テュルク語文書を中心に」(小澤実・長縄宣博編『北西ユーラシアの歴史空間——前近代ロシアと周辺世界』(北海道大学出版会 二〇一六年三月 一九五・三二頁)などを挙げる。
- (京都大学人文科学研究所文化構成研究部門・助教)